

石川県立美術館だより

平成15年4月1日発行 第234号



石川県指定文化財 十六羅漢図 長谷川信春 霊泉寺蔵
(2ページ「春の優品選」第2展示室)参照)

目次

春の優品選(前田育徳会展示室).....2	対談(前田利祐氏・当館館長).....5
春の優品選(第2展示室).....2	平成十四年度新収蔵品一覧.....6
常設展示室 主な展示作品、図書閲覧室NOW...3	企画展TOPIC(本文) 四月の行事案内、他...7
展覧会回顧(平成十四年度開催の展覧会2)...4	企画展TOPIC(図版) 友の会からのお知らせ...8
美術館小史・余話(32).....4	

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

春の優品選

4月1日(火)~20日(日)前期

4月25日(金)~5月25日(日)後期

本特集では、前期(四月一日~二十日)・後期(四月二十五日~五月二十五日)に分けて全三十一点を展示します。ここではうち六点を紹介します。

黒塗布目引出絵替絵具 筥【前期】

伝二代五十嵐道甫作

室町時代の蒔絵の流れを汲む五十嵐蒔絵は、道甫が金沢へ招かれたことにより、江戸時代「加賀蒔絵」として華開きます。筥に納められた十四の引出の模様は、扇面・日の出に流水・有職紋・桔梗・梅樹・萩・竹・羊歯など十二種類にも及び、自然の景物や散らし意匠を得意としたことがよく伺えます。

重要文化財 四季花鳥図屏風【後期】

六曲一双 伝雪舟筆

「行年七十一雪舟筆」の署名と「雪舟」の重廓方印が押された、古くより前田家に伝わる名品です。中国に渡った雪舟は、明代の花鳥画の影響を受けた癖の強い著色の花鳥画を多く遺しています。本屏風もあらゆる鳥と樹木が、遠近感を無視したかのように、複雑に絡み合いながら描かれています。岩間より伸びる松の上に凄然とたたずむ鶴の姿や、画面を断ち切るように伸びた竹が印象的です。

鷹狩図絵巻 春【前期】・夏【後期】各一卷 梅田九栄筆

本図は、近年、久隅守景による「鷹狩図屏風」と描かれるモチーフに共通性のあることが指摘されました。代々九栄を名乗った梅田家は加賀藩に仕えた狩野派絵師の家で、本図は十七世紀に活躍した六代のもので、狩野派において鷹狩に関する図様が引き継がれたということ、武士社会における鷹狩の重要性を物語っています。春は桜が咲く山道を抜けながら鷹狩に向かい、夏は川辺に鷹を放ち船小屋に集う人々の姿が描かれています。

銀牡丹唐草象嵌鏡・銀瓢 象嵌鏡【前後期】

金銀障子象嵌鏡【後期】

鏡は馬に乗る際に足を乗せる馬具です。加賀藩でつくられた鏡は、素地を掘り金属を嵌め込む象嵌の技術により、美しい模様が施されていることが特徴です。特に「金銀障子象嵌鏡」は、金と銀を用いて障子を表しそれを散らすことにより、小さな鏡の中に、大きな異空間を見事に創り上げています。

今回の特集は、「人物の表現」の観点から絵画の優品を展示します。描かれた人物としては、羅漢のように厳しい修行を経て信仰の対象となったものや、俗世間に見切りをつけた高士から、年中行事の一観客まで様々ですが、いずれの場合も人物の表現は画一的ではなく、対象に適した手法が選ばれています。

たとえば、石川県指定文化財の長谷川信春筆「十六羅漢図」(霊泉寺蔵・表紙写真)では、羅漢が修行の結果獲得したある種の超越性を強調するために、極めて非日常的な表現が考案されています。まず注目されるのは顔の表情です。ここには均整のとれた美しさは認められません。だからといって醜怪と言い切ることもできません。信春の表現は、もちろん伝統に立脚したのですが、この作品には表面だけを模倣した安易さはなく、修行者の強靱な意志に対する画家の深い共感が感じられます。そしてたとえば虎や龍など日常的・非日常的な存在との大小の比較や位置関係によって、羅漢の本質が自ずと明らかになってゆくような信春時代の等伯の構力も特筆されます。

続いて狩野派の有力画家による同じく県指定文化財の「四季耕作図」(大乘寺蔵・3ページ写真)に注目したいと想います。この画題は、為政者が民の労苦しのぶという儒教的な意味合いをもって中国からもたらされたもので、特に室町時代以降、この作品のような中国風俗で盛んに描かれました。人物の表現をみると、農耕作業そのものの描写は類型的ですが、その周囲に、作業を眺める人物や談笑する人物などを配置して、儒教的な押しつけがましさを低減して、鑑賞者に親近感を抱かせるような配慮が認められます。こうした表現は、中国の画題の日本化と位置付けることができます。そしてその根底には、折々の人々の生活を描いた月次絵に特別の詩情を結びつけた日本の伝統的美意識が大きな影響を与えています。



遊楽図 個人蔵

常設展示室(第2展示室)

特集

春の優品選

4月1日(火)~20日(日)前期

4月25日(金)~5月25日(日)後期

常設展示室

主な展示作品

4月1日(火)~20日(日)

● = 国宝 = 重要文化財
○ = 石川県指定文化財



●色絵雉香炉(右)
色絵雉香炉(左)
野々村仁清

前田育徳会展示室

特集 春の優品選(前期)

女三十六歌仙色紙雑圖

蒔絵三十六歌仙花卉文提重

黒塗村梨子地桜寿帯鳥文蒔絵鞍・鏡

黒塗布目引出絵替絵具箆筒 伝二代五十嵐道甫

鷹狩図絵巻(春) 梅田九栄

作土形花兔文様金襴(角倉金襴)

花葉松毬唐草文様緞子(笹蔓緞子)

縞文様間道(青木間道)

第1展示室

●色絵雉香炉

色絵雉香炉

野々村仁清

第2展示室

古九谷

色絵鳳凰図平鉢

色絵唐子山水図平鉢

色絵海老藻文平鉢

特集 春の優品選(前期)

十六羅漢図 霊泉寺蔵

樹下人物図 個人蔵

四季耕作図 大乘寺蔵

富士巻狩図

加茂競馬・鞍馬火祭り図 個人蔵

遊楽図 個人蔵

長谷川信春

第3~6展示室は、四月二十日(日)まで第59回現代美術展会場となっております。通常の展示は四月二十五日(金)からですが、次号でご案内いたします。

観覧料

一般 350円	個人	団体(20名以上)
大学生 280円		
高校生以下は 無料		
一般 280円	個人	団体(20名以上)
大学生 220円		
高校生以下は 無料		



四季耕作図 大乘寺蔵



色絵唐子山水図平鉢 古九谷



色絵鳳凰図平鉢 古九谷

図書閲覧室NOW 新着図書紹介

現在、作家活動をしている美術・工芸家は、一般にさまざまな美術団体に所属し、その場を活動の中心として作品を発表することが、多く見受けられます。(もちろん、団体に所属しない人たちもいます)ただ、そうした芸術家たちも、個展やグループ展などで新作を発表し、そこで得た成果を次の制作の糧にしていくという試みも、よく見られることです。そこで今回は、当県ゆかりの作家による、最近の個展・グループ展の図録を、何冊か紹介してみたいと思います。

まず陶芸では、「北出不二雄作陶展/2003/高島屋」と、「徳田八十吉三代展 現代九谷の流れ/2002/西武」を取り上げます。前者は、ペルシア風な彩陶や釘彫りなどの作風で知られる、現代九谷陶芸界を代表する北出氏の近作展の図録です。後者は、現代感覚あふれる色釉の技法で人間国宝に指定された、三代徳田八十吉氏の作品を中心に、九谷上絵の伝統的技法を再生させた初代、二代をまじえて構成される展覧会の図録になります。また漆芸では、「うるし・小森邦衛展/2003/三越」があります。これは、輪島出身で、竹を編んだ素地に漆を塗る籃胎や、曲げた木を使う曲輪といった技法によって、味わい深い作品を生み出している小森氏の近作展の図録です。

次に、油彩画の分野から、「森本仁平油絵展/2003/三越」、「開光市展/2003/日動画廊」をみてみましょう。加賀市出身の森本氏は、詩情豊かな風景画で知られる作家です。この展覧会には、淡い色調と繊細な筆致によって、関東や東北の静謐な空間を表現した新作が発表されています。また開氏は、金沢市内の高校で教鞭をとるかたわら、旺盛な作画活動を行っている作家です。この四月に予定されている個展では、深い精神性をたたえた力強い独特の作風が注目されるところです。

これらの図録は、作家の活動を集大成したような大部のものではなく、小冊子といえるようなものですが、作家の最新の情報を知る上で、貴重な資料といえましょう。

開室時間は午前九時三十分~午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません。


 展覧会回顧

平成十四年度開催の展覧会(一)

後期に一階企画展示室で開催された当館主催の特別展は二回です。

九月から十月にかけて開催した「利家とまつ 加賀百万石物語展 前田家と加賀文化」は、NHK大河ドラマ「利家とまつ 加賀百万石物語」と連動した展覧会でした。ドラマに出演している三人の俳優さんの出席による華やかな開会式で幕開けし、前田家十八代当主前田利祐氏と嶋崎丞館長による対談や講演会、ミュージアムコンサート、土曜講座、列品解説などのいろいろな関連事業を開催したこと、報道各社の協力を得て展覧会をよく広報できたこと、また、金沢城公園で加賀百万石博が開催されており、展覧会へも関心を持ってもらえたこと等々の要因が考えられると思いますが、全国からの多数の入場者で賑わいました。

一月に開催しました「鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展」は、現代洋画壇の最高峰の一人脇田和氏の初期(初期の作品はほとんど戦災で失われましたので、少数でしたが)から近作までの油彩・水彩・素描・版画等の代表作一三七点で、氏の芸術の全貌を紹介するものでした。鳥と子供を題材とし、エレガントでほのぼのとする心温まる作品群に、若い人たちだけでなく、以前、雑誌の表紙絵や挿絵などで見て好きだったという年配の方々の入場も多数ありました。

二階常設展示室で開催した特別陳列や特集は二十六回を数えました。

「甲冑と陣羽織」は、平成九年以来久しぶりの展覧でした。修復が完了しました三代藩主利常所用の『黒塗六十二間甲冑』をはじめとする歴代藩主の甲冑

と陣羽織により、武門としての加賀藩前田家を紹介する展観でした。

「近代の美術」は、例年のテーマですが、今回は日本の絵画、彫刻とともに十六代当主利常によって収集された西洋絵画に特徴を持たせました。レンブラントやルノワールなど七作家、十点の作品群により、前田家のコレクションの幅の広さを紹介するものでした。

「加賀藩の美術工芸」では、重文『荏柄天神縁起絵巻(五代藩主綱紀が収集したもの)』、重文『武家手鑑(十六代当主利常が、五代藩主綱紀の方針を継承して新たに編集したもの)』、『職人歌合(三代藩主利常が後水尾院から賜ったもの)』などを展示し、隣の第2展示室(利家とまつ 加賀百万石物語展)との連携により、加賀文化のすばらしさを堪能したという言葉を変多く聞きました。

「名物裂の精華」は、例年のテーマですが、今回は、台紙貼のものに、反物としての形状をとどめ、舶載された当時に彷彿とさせる『騎羊人物椿梅折枝文様金襴』、『有栖川錦』、『蜀江錦』、錦の中では異色の絵画文様の『清水裂』なども展示し、女性ファンを中心に話題となりました。

「プリズムのきらめきから 西田洋一郎 絵画空間」は、初期から近作までの絵画作品と現在展開しているコンピュータグラフィックス(CG)による作品を展示しました。CGをプロジェクトで投影したり、モニターでご覧いただくという、普段とは違う展示でしたので、鑑賞者から県立美術館もこういう展示をするようになったかという声も聞かれました。

「染色パネルの美」は、漆パネルや陶額と同じく素材を生かした一表現形態としての染色パネルを特集したもので、ある程度の制限を受ける着物とは違う自由な表現世界を鑑賞いただきました。

(南 俊英 学芸第一課長)

美術館小史・余話

32

 嶋崎 丞すまむ 当館館長

日本の今日の経済は不況に苦しんでいるが、昭和四十、五十年代は、世界がうらやむほどの見事な成長発展を遂げた時期であった。国民生活が豊かになり、生活様式が急激に変化し、各地の開発に伴って文化財の破壊行為が進んできた。そしてこうした状況から文化財を守り保存するために、博物館を建設しようという気運が高まってきた。

このことに加え、昭和四十三年が明治百年に当たっており、地方公共団体は豊かな財源を背景に、記念事業として博物館や美術館の建設を行ったことから、この頃は「博物館ブームの到来」といわれたものである。北陸でも福井県立美術館が昭和五十二年十一月に、富山県立近代美術館が昭和五十六年七月にそれぞれ新設開館した。こういった諸設備が完備した大型美術館が姿を現すと、昭和三十四年に開館した小型の石川県美術館は、実に見劣りがするようになってきた。

この連載の二回目(『だより』第二〇三号)で述べたように、旧石川県美術館は収蔵品を常設展示し、企画展を開催することを目的とした、博物館機能を優先する美術館である。従って作家活動が盛んな石川県という土地柄にあつては、多くの作家たちにとって、自分たちの作品の発表の場として美術館が使えないということが、大きい不満が残った。そうした作家たちのくすぶった心は、いつしかもう一つの美術館 近代美術館建設の要望という形となり、各県で始まった大型美術館建設ブームが追い風となり、昭和四十八年二月に、県に対して「新美術館建設について」の陳情という形になって表れてきた。

美術館側にとっても、この頃から企画展の規模が次第に大型化し、小型の旧石川県美術館の施設でも、その対応が困難となってきた。こうした事情が合致して、新美術館を建設しようという動きが漸く始まったのである。

「新美術館建設について」の陳情

対談

「利家とまつ」前田家当主 先祖を語る

前田利祐氏（前田家十八代当主）
嶋崎 丞（聞き手・当館館長）

大河ドラマ「利家とまつ」は、私には自分の家のことでありまして、「変なことを言われても困るな」とは思いながらも、「どうせ八十%はフィクションなのだから、楽しもう」と。はじめはNHKから台本が送られてきて、「変なところがあったらおっしゃってください」と言われたのですが、全部お任せしました。そしたら意外や意外、人気があるようで、嬉しく思っております。

利家の印象ですが、これまでの大河ドラマの中でも、秀吉や家康の脇役として、ちよろちよると利家というのは出ております。しかし、その度に俳優さんが代わるので「あれあれ」と思いながら見ておりましたが、これだけ長く一人の方が務めると、今の主役の方のイメージがそのまま歴史のイメージになってしまうのではないかと思っております。別にそれはいいことに構わないことで、ドラマによって石川県の方をはじめ、皆さんがご自分の土地の歴史に関心を持ってもらえれば、何よりと思っております。

（前田氏）

ドラマの中で利家は、信長に対して堂々と物申しています。（館長）

利家というのは、成りあがり者でありまして、信長に拾われて、同性愛に近い状態にあったかもしれません。あの頃というのは儒教も入って



ませんし、体制もできておりませんから、割と自由闊達に皆が動いていた時代だったと思います。まつもドラマの中では利家を引っ叩いたりしていますけれども、やはり自由だったのだと思います。世が乱れている時というのは、大抵女性は強いものです。

戦国武将に茶の湯の嗜みは必要だったのではないかと思います。利家はただかぶいて、槍を振り回していたわけですから、文化や教養というものは、少なくとも三十代まではまったく持っていなかったと思います。そのうちに偉くなって、格好をつけなくてははいけません。武家同士、公家との付き合いの中で謡やお茶が必須科目になり、そこで急いで習った、というのが正しいと思います。秀吉も恐らく同様で、付け焼刃だったのではないのでしょうか。

展示しております玉潤の「洞庭秋月図」は、家康から利家へ贈られたものと伝えられています。利家と家康の関係は？

利家は五十六歳で亡くなりますが、最後の十年くらいで、やれ教養だ、やれお付き合いだというのが始まり、秀吉が死ぬ頃、利家は五大老の中で一番偉い顔をしていましたから、五大老の中の付き合いとして、贈り合ったりしたのではないのでしょうか。

まつの手紙を読むと、家康に対しては言いたい放題ですね。



まつは家康から近江に土地をもらっています。これは幕末まで続きます。恐らく徳川家ではまつを乱暴に扱えない、というのがあったのではないのでしょうか。

字も非常に上手ですね。

これは残念ながら、先祖になるほど字は上手いですね。私なんか全然駄目ですけれども。

三代の利常は利家の四男ですが、利常の文化に対する考え方は、利家に見習うものがあつたと思うのですが。

うちは初代、三代、五代（綱紀）、十三代（齊泰）と、奇数の藩主は偉くて偶数はあんまり偉くない。私はまあ偶数でございますので、あんまり偉くない順番なんですけれども。何年かに一度すごい人が出てくる。それで前田家は続いていると思うのです。武力じゃ徳川には適わないということで、三代は文化に力を入れようとした。この頃にお茶の方や大樋さんをお呼びして、文化的なことに力を入れるようになります。三代から五代の時代が今日の「加賀藩の伝統」になるのですが、いわゆる出来上がったものを言うのではなくて、つくる人を選んで来て、それでつくってもらおう。そしてお弟子さんを増やす。それを始めた人が三代なのです。

「利家とまつ 加賀百万石物語展」にちなんで、昨年九月十四日にホールで行われた対談内容の一部をご紹介します。（）

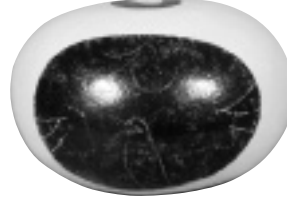
平成14年度 新収蔵品一覽

平成十四年度の新収蔵品は、寄贈二十一点、購入九点、計三十点となりました。ご寄贈を賜りました各位に対し、改めて感謝の意を表します。また今後とも皆様により一層のご協力をお願いいたします。
平成十五年三月三十一日現在の収蔵品総数は二千七百二十一点です。

- 陶磁
 - 錆絵寒山拾得図水指 古清水 牛村繁男氏寄附
 - 黒絵立鼓花器 十代大樋長左衛門作
 - 黒絵鳥文楕円壺 十代大樋長左衛門作
 - 十代大樋長左衛門氏寄附
- 牡丹図鉢 南 繁正作
- 色絵八稜鉢 佐藤 亮作
- 爛漫 中 憲一作
- 漆工
 - 蒔絵螺鈿白楽天図硯箱 尾形光琳作
 - 蒔絵和漢両景図硯箱
- 冬の朝 佐藤幸一作 佐藤幸一氏寄附
- 蝶日月文八足盤 小西啓介作 小西啓介氏寄附
- 水 西塚栄治作 西塚栄治氏寄附
- 染色
 - 友禅訪問着「ギャラリーにて」 法邑利博作
 - 友禅黒留袖「彩宴」 勝野緑峯作
- 金工・刀剣
 - 朱銅三筋文花入 高村豊周作 今井 博氏寄附
 - 砂張銅鑊 三代魚住為楽作
 - 脇指 銘播磨大塚藤原重高(附)黒塗竜文螺鈿脇指拵 清水時雄氏寄附
- 截金
 - 木彫截金扇面秋の合子 西出大三作
- 油彩画
 - コレクション・囲まれた男 大場吉美筆
- プリズム分光画 西田洋一郎筆 大場吉美氏寄附
- 曲と直の自然則 西田洋一郎筆 西田洋一郎氏寄附
- カーニバル幾何広場(1) 西田洋一郎筆 西田洋一郎氏寄附



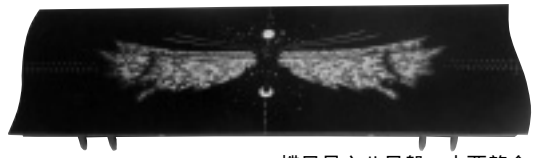
朱銅三筋文花入 高村豊周



黒絵鳥文楕円壺 十代大樋長左衛門



錆絵寒山拾得図水指 古清水

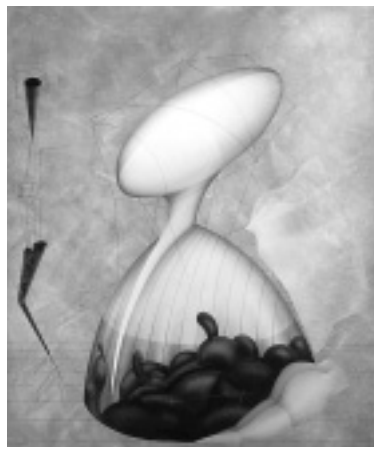


蝶日月文八足盤 小西啓介

- シャルトル風景 増田 孝筆
- ひととき 増田 孝筆
- 春の人形 増田 孝筆
- 初夏の人形 増田 孝筆
- チェス台と編み上げ靴の人形 増田 孝筆
- 萌 藤田 弘筆
- 連理 脇田 和筆
- 春めく 村田省蔵筆
- 日本画 高柳錦吾氏寄附
- 放馬図屏風 佐々木泉景筆



チェス台と編み上げ靴の人形 増田 孝



コレクション・囲まれた男 大場吉美



連理 脇田 和



放馬図屏風 佐々木泉景

企画展TOPIC

北野恒富展
金沢が生んだ美人画の巨匠 その一

今回は、北野恒富という人物について、その足跡をたどってみたいですが、今回は、作品の特徴を概観してみたいと思います。

恒富は明治三十年に大阪に移り、翌年、浮世絵の流れをくむ稲野年恒に師事していますが、この頃は、新聞の挿絵の彫り師として活動していたようです。それもある時、意を決して彫刻用の道具を川に投げ捨て、本格的に絵を描くようになったといわれています。はじめは、小説の挿絵をよく描いていたようで、線描や構図法などの研究に役だったと考えられます。こうした経験は、後年、親交を結んだ谷崎潤一郎の小説の挿絵などに活かされています。

恒富は、二十五歳の頃から、次第に展覧会を意識した制作を行うようになり、四十三年に文展に初入選、翌年の文展では三等賞を得て、画壇に一躍その名が知られるようになります。この頃の作品は、「浴後」(8ページ図版)に見られるように、類魔的な工口チズムを匂わせるものが多く、京都の画家から「画壇の悪魔派」と呼ばれ注目されたといえます。またこの時期から、恒富はポスターのデザインも行っています。ここに掲載した「婦人」()は、大阪の高島屋で開かれた展覧会のポスターの原画で、当時、評判を呼びました。

大正に入ると、活動の舞台を院展に移し、古典や洋画などの研究から得た表現を深化させ、意欲的な創作を行います。九年に描かれた「淀君」()は、この時期を代表する作品の一つで、落城寸前の大阪城での淀君の姿を幻想的に描き出し、とりわけ小袖や打ち掛けの細密で重厚な表現は、見るものを圧倒します。

昭和になると、大阪の商家なども題材に、品格ある古典的画風を展開しました。「いとさんこいさん」()は大阪の良家の子女を描いた作品で、まさに浪花の情緒があふれる典雅な表現となっています。

本展は、所蔵者の都合で、会期中に一部展示替えを行います。ここで紹介した作品については、展示していない時期もありますのでご注意ください。

美術館の本

- 石川県立美術館所蔵品図録 税込定価(円)三、五〇〇
- 石川県立美術館所蔵 九谷名品図録(改訂版) 二、〇〇〇
- 花と緑の名品図展 自然との対話 二、〇〇〇
- 日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界 二、二〇〇
- 鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展 二、二〇〇
- 最新刊(四月十六日発売)
- 北野恒富展 金沢が生んだ美人画の巨匠 二、〇〇〇
- ミニージャムショップで販売中!!
- 郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

〒076-2331 七五八〇

企画展示室

第59回現代美術展

四月五日(土)～二十日(日)
(第3～9展示室)
部門 日本画 洋画 彫刻 工芸 書 写真
入場料 一般八〇〇円 大高生六〇〇円 中小生五〇〇円
団体料金は各二〇〇円引
当館友の会会員は会員証提示により団体料金
連絡先 金沢市香林坊二五 一北國新聞社事業局
☎076-260-3581

四月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
4/6(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 カール・ベーム 1 シューベルト交響曲第9番ほか(約70分) 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール
4/13(日)	月例映画会	日本美術工芸 その手わざと美(28分)	ホール
4/20(日)	月例映画会	現代彫刻 彫る 本郷新の世界(31分)	ホール
4/26(土)	土曜講座	美人画について (西田孝司 学芸主査)	講義室
4/27(日)	講演会	北野恒富とその時代 金沢に生まれた美人画の巨匠 講師 加藤類子氏 (池坊短期大学教授、前京都国立近代美術館主任研究官)	ホール

四月の全館休館日は二十一日(月)～二十四日(木)です。

各地の展覧会

四月

- 開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
- 御影堂平成大修復事業記念 西本願寺展 5/5まで
- 東京国立博物館(東京都台東区) 〇三三八三三 一一一一
- 今日の人形芸術 一想念(おせい)の造形 5/18まで
- 東京国立近代美術館(東京都千代田区) 〇三三三三三 七七八二
- 菱田春草展 4/11～5/18
- 愛知県美術館(名古屋市中区) 〇五二一九七 五五一一
- フランク象徴派展 4/5～5/11
- 滋賀県立近代美術館(大津市) 〇七七五四三二 二二一一
- 空海と高野山 4/15～5/25
- 京都国立博物館(京都市東山区) 〇七五五四 一一五一一

次回の展覧会

- 特集 春の優品選(後期) (前田育徳会展示室)
- 特集 鴨居 玲 (第2展示室)
- 四月二十五日(金)～五月二十五日(日) (第3展示室)

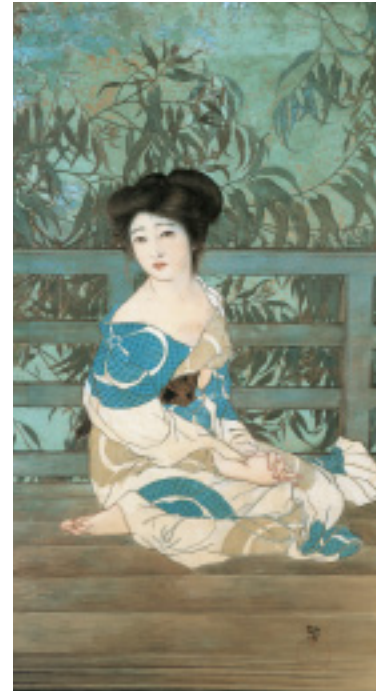
- 開館20周年記念
- 北野恒富展 ー金沢が生んだ美人画の巨匠ー (第7～9展示室)
- 四月二十六日(土)～五月二十五日(日)



淀君 大正9年
耕三寺博物館蔵



婦人(ポスター原画)
昭和4年 高島屋史料館蔵



浴後 明治45・大正元年
京都市美術館蔵
との展示期間は5月11日～25日。
いとさんこいさん 昭和11年 京都市美術館蔵
(右隻)

(左隻)



友の会からのお知らせ

920-0963
金沢市出羽町2-1

石川 泉美様 2003

会員番号
会員証裏面左上の番号と同じ
ものです。

郵便番号バーコード

このたびは友の会へご入会下さいましてありがとうございます。会員の皆様のお手許にはこの『美術館だより』を毎月お送りいたしますが、送付封筒表宛先ラベルは上記のようになっております。記載事項に誤りまたは今後変更などがございましたら、お手数でもご一報下さいませようお願いたします。また会員証提示による入館料割引は、石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館でも受けることができます。いずれも各館主催展覧会に限りですが、お出かけの際にはどうぞご利用下さい。

「北野恒富展」金沢が生んだ美人画の巨匠「関連行事」
講演会 聴講無料

演題 北野恒富とその時代
講師 加藤類子氏（池坊短期大学教授）
・前京都国立近代美術館主任研究官）
日時 四月二十七日(日)午後一時三十分
会場 当館ホール

休館日

四月二十一日(月)～二十四日(木)

石川県立美術館だより

第一二三四号 平成十五年四月一日発行

〒九二〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(三三)七五八〇

FAX 〇七六(三三)九五五〇